

モンテッソーリ教育学における弱者と偏見の捉え方  
How to perceive the weak and prejudice in Montessori pedagogy

保田 恵莉\*

滋賀短期大学 幼児教育保育学科

Eri YASUDA

Department of Early Childhood Care and Education, Shiga Junior College

**Abstract:** How are the vulnerable and prejudiced in Montessori pedagogy perceived? What is the state of mind of people with prejudice? In this paper, I discuss with reference to the Bible while stopping the experience and thoughts of the author who is a Baptist. we seek the savior by exploring the prejudice of the poor and disabled. It contains the desire of Maria Montessori for a society without discrimination.

**キーワード:** モンテッソーリ教育学, 弱者と偏見, 聖書, 創造的使命

**Keyword:** Montessori Pedagogy, Weak and prejudice, Bible, Creative mission

## 1. はじめに

弱者とは何か。それは、貧しい者や病める者、困難や障害を持つ者を本稿では指している。イエス・キリストは、新約聖書の中で救い主イエスの登場により、弱者を荒野から聖地に戻された。しかし、旧約聖書には、罪人を許し、弱者を叩くことが記されている。さらに、「罪人」とは、罪を犯す者、「人間その者である」ということを唱えている。

近年の日本の国の様々な社会問題を振り返りながら考察していくと、人間の欲望 (desire) について浮かび上がってくる。

人間は損得に囚われ、損な人々に関わらない。さらに、日々の時間のなさも加わり、

弱者に手を差し伸べることを怠るようになった。それは人間の全てではなく一部の人間であることは言うまでもないが、社会が先進化し豊かになった反面、人間が欲望や利益のために人として大切なものを少しずつ失ってきたことは確かである。

絵本や物語の講話を始めて、早くも 22 年の歳月が流れた。初めての講話の時には母親も喜びを持たれ、自身の創作活動の取り組みを話してくださったが、段々にそのような姿が減少し、近年、絵本や物語はこどもの育ちのためだけではなく、母親の癒しや栄養になってきているように思われる。

子育て支援室では多くの母親から不登校やいじめといった偏見の悩みや発達に

---

\* E-mail: e-yasuda@sumire.ac.jp

遅れのある障害の不安をお聞きする。時折、聖書を用いて話をさせていただくと、気持ち落ち着かれ、穏やかな顔になられる母親の姿も目にする。現代の日本の国でたくさんの方の心の問題が浮かび上がる中、解決の糸口になるものは何かと自問自答しながら、「偏見から人を救い、自ら人間を創り出す」というイタリアの女性医学博士マリア・モンテッソーリ (Maria Montessori 1870-1952) 教育学に行き着いた。

## 2. モンテッソーリ教育学のこどもの教義

こどもが人間を創り、正常化した大人を創ることによってしか為しとげられない革命には、こどもの創造的使命がある。

マリア・モンテッソーリは、大人がこどもを創るのではなく、こどもが自ら自分を創り出すという願いを持ち、そのために、今日社会は、こどもにしかるべき配慮をする義務がある。同時に、こどもの権利を認め、弱者への偏見を取り除き、こどもの生命が必要とするものを提供しなければならないことを世に伝えるべきである。

かつて、伝統主義的教育においては、大人がこどもを創ると考えられていたが、モンテッソーリは、生前、貧しいスラム街の「子供の家」を拠点に、こどもが生命の法則に従い自分で自己を建設することを講話することが常であった。本論では、弱者と偏見を論じる中、どのようなこどもも同じように愛情を掛け、援助するのが大人の義務、社会の義務なのであるということを、再認識したいと考える。こどもの援助とは、モンテッソーリが自ら示したように、基本

的には「目の前にいるこどもを観察する」ことの中から導き出すものである。モンテッソーリ教育運動の過熱と衰退の歴史の内にも、この教育動作は見え隠れしながら現代の幼児教育に影響を与えてきた。

比喩的にモンテッソーリが語った一説がある。

「もし、犬に指差して、犬にあれをとってくるように示すと、犬は差した指だけを見て、その示されたものを見ないのです。犬は物を取ってくるために、示された方向へ従わねばならないことを理解するよりも、むしろ指をかむでしょう。偏見と障害は同じように働き、人々は私の人差し指を見て最後にかみついたのです<sup>1)</sup>」。

弱者へ対する偏見の恐ろしさをこの一文に込めたモンテッソーリ博士の心をそのとき関わった神父は重く受け止めた。しかし、反面、カトリック教会では神父により「人は誰も罪人であるが弱者の抱える障害や偏見は決して与えられた罰ではないのだ」ということが語られている。

心理学によると、人は自我と自尊心から成り立つ。また、利己主義(エゴイズム)を短縮した言葉から「人はエゴである者」と言われることもある。現代の人の関係性は非常に狭く、同じような悩みを抱えて子育て支援室を訪れる親同士でさえ上手く交われないことがある。モンテッソーリのように全ての人に愛情が持てる生き方は難しく、「気に入る、気に入らない」という狭い範囲の考え方から、「気に入らない人は

何をしても気に入られない」という悲しい現状が社会における暮らしの中でも起こっている。そこで、精神分野での互いの理解は困難であるが、モンテッソーリ教育学の目指すところが人間陶冶であることをテーマにおき、人間の再認識を行うことを考えた。マリア・モンテッソーリはこどもの誕生の喜びと人間本来の慈しみを人々に伝授している。

本稿では、モンテッソーリ教育学における弱者と偏見について、モンテッソーリが重んじた聖書を参考にしながら学術と共に明らかにしていきたい。

### 3. 聖書による偏見と障害の捉え

旧約聖書には、弱者を労わり、主イエスの存在を肯定する一節がある。「耳の聞こえぬ者を悪く告げ、目の見えない者の近くに障害物を置いてはならない。神を呼びなさい、私は主である(レビ記第 19 章の 14 節)」しかし、聖書は一方では主を否定し、「主は、再度あなたを鞭で打ち、気を狂わせ盲目にし、あなたの精神を錯乱させられる(申命記第 28 章 28 節)」と述べている。イタリアの医学博士 Maria Montessori (マリア・モンテッソーリ、1870-1952) は、モンテッソーリ協会での博士の履歴に寄ると、1951 年から 2 年間、ローマで開催されていたモンテッソーリ教員養成コースの従事の中で「こどもの奇跡」という講演を繰り返した。演壇に立ったマリア・モンテッソーリは、自身が障害を抱えたこども達と「こどもの家」で過ごした 1907 年からの 40 年間の思いを後世に継ぐ世界平和へ

の強い意思と情熱を持ち、人々に語りかけている。「障害観の変換において、大人は障害が個性であると捉える心の整理が要る。イエスが悪霊を雲に変え、人の偏見を土に埋め、障害を持つこどもにも光を注ぎ、孤独な母子の隣人となったことを誰もが知りなさい。(1952 年 7 月:ローマ)」この言葉に関連した新約聖書では、イエスが障害について次のように述べている。「生まれつき目が見えないのは、本人が罪を犯したからでも両親が罪を犯したからでもない。神の業が人に現れるためだ。(ヨハネによる福音書第 9 章 3 節)」つまり、新約聖書は障害が罪に寄るものではなく、因果に基づくものでもなく、生まれつき目が見えないことは常に弱者を守る神の業があることを告げている。

さらに、モンテッソーリ教育学の考え方においては、社会的に逸脱行為を犯した受刑者達が更生する際にも聖書を応用して伝授されている。イギリスロンドンの女性刑務所内の母親学級や、アンゼルチンに位置する刑務所では、モンテッソーリ教具を参考にし、教具が更生プログラムの玩具として制作に使われている<sup>2)</sup>。罪人にも誰かの役に立てる仕事があり、社会的意義があることを見出し、それらの営みが更生する人間の社会復帰の一步となるよう、モンテッソーリ教育は手伝いをしているのである。モンテッソーリ教育におけるこどもの教義とは、人間の違いを認めるものであり、どのような国籍であろうと、どのように貧富の差であろうと、差別なく平等に、人が人を受け入れることを導いている。

聖書の中でも申命記は唯一の律法であると言われている。モーセがヨルダン川を横切る少し前に東岸の地で律法をイスラエル人に予告したという観点から既に神の歴史と共に不動の位置を占めていたためであるとカトリック教会のシスターからお聞きした。(A. サファニィ, 2016) 旧約聖書には, 社会法則, 儀礼規定等の様々な法規が存在し, 教会では有名な十戒は, 現代もキリスト教の中核として生かされている。聖書の十戒には, 人と神の関係を重んじた関係規範と隣人への愛に伴う倫理が示されている。「生きる者は命の道に身を置くことが許されるが, 逆らう者は呪いの道に身を委ねなければならない」と記された。モーセが神からいただいた律法の中の節の言葉は, 一度言葉が置き換えられ, 出エジプト記 20 章 18 節「呪いの掟」の部分で歪みとも捉えられる。具体的には「道を尋ねる盲人を道に迷わせる者は呪われ, 罰を受ける」, 19 節に続いて, 「孤児や寄留者の権利を剥奪する者は呪われる」等, 不吉を予感させながらも弱者を救う言葉が連なっている。これらは, 「あなたには私他に神があってはならない」という十戒(出 20:3-4)の箇所を含み, 孤児や障害者を労わるものでもある。続いて, レビ記 19 章(9-10)においては, 収穫物を必要とする貧しい者への配慮の一節が次のように記されている。「穀物を収穫する時は, 畑の隅まで借り尽くしてはならない。収穫後の落ち葉を拾い集めることもしてはならない。ブドウの実も積み尽くしてはならない。落ちた実も拾い集めてはならない。これらの

収穫物は貧しい者や寄留者のために残して置かなければならない。私はあなた達の神, 主である」[旧約新約聖書大辞典(1989)p.126] 神(聖書で言う主)は, 社会的に弱者である立場の孤児や障害者の権利を守ることを聖書は命じている。しかし, 貧しい人々に食物を与えればそれで義務を果たしたことにはならない。行為以上に, 受け取る人間の感情や自尊心を傷つけないようにしなければならない<sup>3)</sup>。与える側の権利のみでなく, 与えられる側の権利も考えなければならないことを指摘する(M. マドラー, 1991)。社会的弱者の隣人になり, 偏見と障害を受け入れることを聖書は導き通している。そして, その後も, 新約聖書においてイエスの登場により, 差別的な表現は徐々に消えていることがわかる。

#### 4. 聖書による罪人の語り

AVSCO(キリスト教視聴覚 Center)による聖書の語りの中では, 旧約聖書と新約聖書, それぞれのお話が記されているが, 本稿では, どちらの聖書からも 2 編ずつの語りを筆者の解説により, 取り上げることにする。

##### 4-1 旧約聖書(創世記 2:15~3:24)

###### アダムとイブ

神様がお造りになった最初の男の人アダムと, 女の人エバは, 神様に守られ, 美しい楽園で幸せに暮らしていた。ところが, サタンが蛇の姿をして楽園の真ん中にある木の陰に隠れた。神様はアダムとイブに「ここにあるものは, 何でも食べて良い。それぞれ好むものを存分に食べなさい。

ただ、善悪を知る木から実を取って食べてはならない」と、おっしゃった。二人は言いつけを守っていた。

ある時、蛇がエバに言った。「この実はほんとはとても美味しい。食べたら君も神様のようにになれるよ」賢い蛇が上手に進めたので、エバはほんの一口かじってみた。「本当に甘くて美味しい！」エバはアダムに「この実、とっても美味しいの。一口だけかじってごらんなさい」と、勧めたので、アダムもつい食べてしまった。

その時、夕方の散歩をしていた神様が近づいてきた。二人は、神様の言いつけにそむいたことが恐ろしくなり、木の陰に隠れた。いつもは優しい神様が「アダム、どこにいる？」と恐れ声でおっしゃった。恐る恐る出てきたアダムは、「エバが食べると言ったのであの実を食べてしまいました」と、エバのせいにした。エバは、「蛇に誘われたのです」と、蛇のせいにした。神様は怒り、「二人ともすぐ、ここを出ていけ」と言われた。二人は、楽園から追い出され、自分たちだけで生きて行かなければならないこととなった。悲しみ、出ていく二人を憐れみ、神様は皮の服を作り、二人に与えられた。

#### 図 I(4-1)： 解説「罪と罰」

旧約新約聖書大辞典(1989)によると、障害が罪の結果の罰であるという捉え方は漠然としており、記載のように「旧約聖書における罪とはどのように捉えられていたか」という点を罪の起源となる「アダムとエバ」の話により伝授されている。罪旧約聖書の記載は残酷なものである。神の

の結果は追放であり、滅びであった。申命記第 28 章 28 節では、「主は、あなたを鞭で打って、気を狂わせ、盲目にする。

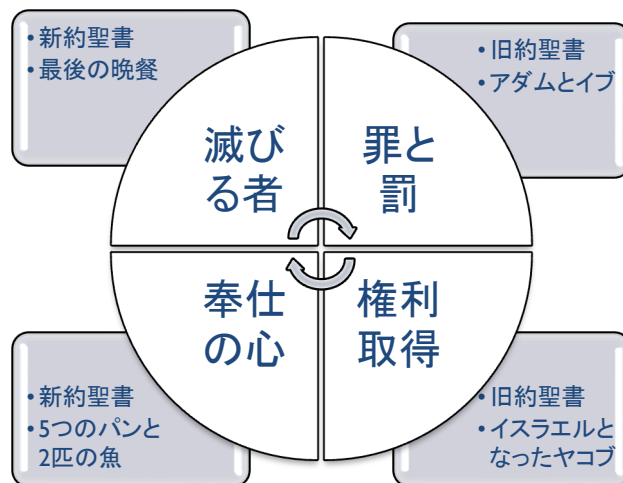


図 I: 旧約聖書と新約聖書から捉える教え

神は人間を平等に愛しみ、そこには契約となる事項は成立しない<sup>4)</sup>。

旧約聖書の記載は残酷なものである。神の戒めに従わなければ、「障害を持つという罰」が与えられる、その上、精神を錯乱させられる。しかし、人間の根本的な罪について述べるならば、一人の人間が殺人を犯したとするならば、それは「刑に罰せられる」ことであり、弱者である障害を受けることも一方的に偏見をあげせられることもない。

#### 4-2 旧約聖書(創世記 25:19～32:32)

##### イスラエルとなったヤコブ

エサウとヤコブは、双子の兄弟であるが、互いに違っていた。エサウは狩人になり、野山を駆け回っていた。ヤコブは母親のリ

ベカと父親のイサクの居る天幕の近くで働いていた。ある日、エサウが疲れて帰ってくると、ヤコブが豆を煮ていた。「美味しそうだな。腹ペコだ。父親から長子の権利をもらうのなんかどうでもいい。頼む、豆を食べさせてくれ」エサウは言った。ヤコブは、「兄さん、本当に権利を僕にくれるのだね。約束だよ」と言い、エサウに豆のご馳走を差し出した。後になり、エサウは後悔したが、もう遅かった。父親は年を取って目が見えない。兄のエサウと間違え、弟のヤコブに相続の約束をしてしまった。長子の権利は、食事と引き換えになどできない大切な者であった。腹を立てているエサウが恐ろしく、ヤコブは逃げ出した。疲れ切ったヤコブは日が暮れて野宿をするようになった。大きな石を一つ転がし、枕にして眠った。すると、夢の中に階段が現れ、天から伸びてきた。その階段を天使が登ったり降りたりしている。そして、神様の声が聞こえてきた。「私はいつも貴方と共にいます。貴方がどこに行こうと、貴方を守り、この地に連れ帰ります」夢から醒めたヤコブは驚いた。「ここは天の門だ」ヤコブは、枕にしていた石を立て、その上に油を注ぎ、この場所をベテル(神の家)と名付けた。ヤコブは、遠いハランの街まで逃げ、その後、結婚し、さらに砂漠を歩き続けた。谷を通り、川を渡った。妻や子ども、それからたくさんの家畜も渡り終わった真夜中に、何者かわからない旅人がヤコブに襲いかかり、ヤコブは夢中で戦った。夜が明ける頃、ヤコブは神に褒められた。「ヤコブ、お前はよく戦った。これからはもうヤコブではな

く、イスラエル(神・エルと戦う人の意)という名前にしなさい」と。その時から、ヤコブは勇敢な者「イスラエル」と呼ばれるようになった。

#### 図 I(4-2): 解説「権利取得」

人の権利と教育の基礎は、こどもの正常化にあると考えるモンテッソーリは、幼少時代に正常を外れ、欲望に身を転じるなど脱線して発育した人間により、社会の過ちが起こることを著書「幼児の秘密」の中から次のように指摘した。

「勢力と権力の獲得に努力する心の逸脱した人の手に陥れば、どんなに善いものでも用いられる時に、彼らによって滅却されるだろう(略)破壊と戦争と搾取に利用される可能性を含んでいる。(略)社会生活の最も根本的な獲得は、人間の正常化に違いないことが認められないうちは、外界からは何も期待できない<sup>5)</sup>」と述べている。こどもの教育上の鍵は、幼児の秘密に隠されている。ヤコブは兄のエサウの放棄した権利をもらい逃げたが、その権利を真に獲得できたのは、勇気を持ち正当な戦いの結果、勝利を得たからであった。人間の潜在的エネルギーにより、モンテッソーリ教育学で語られる「作業」と「集中」の現象により、イスラエルという一人の人物が誕生した。

#### 4-3 新約聖書(ヨハネによる福音書 6:1~14) 5つのパンと2匹の魚

仲の良い羊飼いの少年の兄と妹がいた。ある日のこと、たくさんの人が丘の下に集まった。イエスの話を聞くためである。「行きたいなあ」と少年が呟くと、妹が「行って

いいよ、私が羊の番をしてあげるから」と言ったので、兄は羊飼いの杖を妹に渡し、お弁当を持って丘を降りて行った。イエスの声が聞こえる。「貧しい人々は幸いである。天国はあなた方のものだ」そこに集まっていたのは、皆、貧しい人々であったため、イエスの言葉を聞いて誰もが驚いた。やがて、日が暮れ、夜になった。話が終わったイエスは、弟子たちに、「皆に食べ物を分けてあげなさい」と言った。アンデレという弟子が、「イエス様、それは無理です。ここには五千人の人々がいます。お金もありません」と答えた。しかし、イエスは「うん」と言わなかった。弟子たちが困り果てていると、そこに少年が現れ、自分のお弁当を差し出した。中には、固い小さなパンが五つと、干した魚が2匹入っていた。アンデレは、イエスの元にこの食べ物を持って行った。イエスは、皆を草の上に座らせると、パンと魚を手に乗せ、感謝の祈りをした。そして、5つのパンと2匹の魚を細かく割いて分け、自分は食べないで、「皆で分け合いなさい」と言われた。

#### 図I(4-3)：解説「奉仕の心」

イエスが5つのパンと2匹の魚を一口も食べず、皆で分け合うように促したその「奉仕の心」は、人間には生まれつき備わった精神ではない無償の愛である。マリア・モンテッソーリは、「より善く変わりうる存在としての人間」について、次のように述べた。

「人間はより善く変化することのできる存在であるとの確信が私になれば、これ

まで多くの人々により私に加えられた攻撃を乗り越えることはできなかった<sup>6)</sup>」そして、「人間の精神的喜び、それは、自然に生まれる喜びである<sup>7)</sup>」さらに、「教育は、発達法則に伴う自然の要求を心に留めておくべきである。人々の経験が法則に従うようにこどもを育てる道筋を書き出し、人の誕生から教育を受け、奉仕の心を発見できるようになるからである<sup>8)</sup>」モンテッソーリ教育学では、生得的な発達プログラムに従い自発的に行動し、人間が自分自身で自分を高めていくことを求めた。

#### 4-4 新約聖書(ルカによる福音書 22:7～ 46・マタイによる福音書 26:17～56) 最後の晩餐

ユダヤ人が大事にする過越の日が来た。この日は、パン種を入れない硬いパンを食べ、モーセがイスラエルの人々をエジプトから連れ出した時のことを思い起こす日であった。イエスは、ペトロとヨハネの二人に食事の準備をさせた。いよいよ夕食の 때가やってきた。イエスは、感謝の祈りを捧げ、パンを割いて弟子たち一人ずつに分け与えた。「これはあなた達に与えるわたしの身体です」、このイエスの言葉が何を意味しているのか、弟子たちはわからなかった。しかし、わからないままに「最後の晩餐」と呼ばれる夕食が始まった。イエスは、弟子のペトロの傍に行き、そっと告げた。「わたしはあなたのために祈っておいた。あなたが立ち直ったら、皆を勇気付けてやりなさい」、ペトロは少しムツとした。「イエス様、先生と一緒にしたらわたしは牢屋

に入ることも死ぬこともできます」,イエスは、ペトロの顔をじっと見て悲しそうに言われた。「ペトロよ、あなたは今日ニワトリが泣くまでに三度わたしを知らないと言うだろう」

食事が終わると、感謝の歌を歌いながら弟子たちは暗い外に出ていった。いつものようにオリーブの山に行くために、皆は揃ってイエスの後に続いて行くはずであったが、ユダだけは行かなかった。オリーブの山に着くと、イエスは一生懸命に祈りを始めた。「父よ、御心ならば、この盃を、わたしから取り除けてください。わたしの願いではなく、御心のままになさってください」、それから少し時が経過し、あたりが暗くなった時、オリーブの山の木陰の道を黒々とした男たちがイエスを捕まえようとやってきた。なんと、十二弟子の一人であるユダが、先頭に立ち道案内をしているではないか。真っ暗な中、ユダはイエスに近づき、口づけをした。それが合図であった。イエスに飛びかかろうとした男たちにペトロはナイフを振り回し、一人の男の耳を切り落とした。その時、「やめなさい、ペトロ、ナイフをしまいなさい。剣を使う者は剣で滅びる」と、イエスの厳しい声があたりに響いた。それから、男たちはイエスを捕らえ、夜の道を大司祭の家まで引っ張って連れていった。

#### 図I(4-4)：解説「滅びる者」

カトリック教会ではイエス・キリストを「神さま」と呼ぶ。かつて、マリア・モンテッソーリはロンドンの講演会(1921～1922)において、こどもは小さくとも「神さ

ま」を理解することを告げた。モンテッソーリ教育学は、人間の生きる姿から「神を知り、愛し、神に仕える」という言葉を通し、自分自身と隣人の救いを実現することを宗教的なニュアンスで表現している。イエズス会が世界で取り組んで来た福祉もまた人間が生きる目的を互いに達成できるように「助けるためのもの」であった。最後の晩餐において、弟子の裏切りは罪であるが、剣で裁かれないよう、許しを請うところまでイエスは「父よ、御心のままにしてください」と、祈りを捧げている。自ら滅びる者は、我に返る後に救われる。しかし、高慢に剣を振り回し、人を傷つける者は、滅びる者であると、新約聖書マタイによる福音書26章から読み取ることができる。

次に、「霊操<sup>9)</sup>」と絡み合わせ、「罪と人の滅び」を探求していく。モンテッソーリ教育学では、「霊操」の体験を通して「人間のこころの眼を磨くこと」を行っている。

## 5. モンテッソーリ教育学と霊操

モンテッソーリ教育学は、霊操の体験を通し、こころの眼を磨くと同時に、数々の社会的原理と散りばめられた教育的発想をそこから学び取っている<sup>10)</sup>。

霊操の仕組みに着目すると、祈りの中で神を身近に思うことからキリストのメッセージを個別に受け取り、神と人間への奉仕に献身するようになることと、祈りのパターンを繰り返すことにより、その方法に親しみを抱き習得しながら、宗教的観点から祈りの理解をし、自分なりに見出した方法を習慣化することの2つのことが挙げ



られる。これら2つのことを総合してみると、「何を祈るのか、どのように祈るのか」や「何を学ぶのか、どのように学ぶのか」という自己点検ができることが明らかとなってくる<sup>11)</sup>。このことから、新しい事態や予期しない出来事に出会うことがある時、新たな挑戦として受け止め祈り続けることが可能な人間の育成に結ばれていくことが理解できる。

図2: 「霊操」に関して図式で表した。



**解説:** 霊操は、生きる目的を互いが達成するために助け合うための仕事でもある。広義からは、この仕事を「使徒職」とも呼ぶ<sup>12)</sup>。

モンテッソーリ教育学のねらいとする目標とメソッドが持つ意味が、「霊操」と重なり合っている<sup>13)</sup>。マリア・モンテッソーリが願うこども一人ひとりの自立、そして、それぞれのこどもによって発達の時期が異なる上での自立を援助する方法がここで言う重なり合いに当てはまる。様々なモンテッソーリ教具との出会いが、万物の深い部分に神を見るようにこどもは招かれているのではないだろうか。さらに、神の愛に応え、全てを神と社会の奉仕に捧げることが構造化されているように思う。

## 6. 考察と課題

### (1) 聖書による探求「弱者と偏見」

主は、レビ記19章から20章にかけて穀物の収穫について、ぶどう畑に落ちた実は拾い集めてはいけない。これらは「貧しい者（不自由で働けない者も含）や寄留者のために残しておかなければならないことを述べている。それから、旧約聖書では、障害を持つ者を保護する表現が読み取れる箇所がある。「盲人を道に迷わせる者は呪われる。全ての民は、“アーメン”と言わねばならない」(申命記27:18)、「寄留者、孤児の権利を歪める者は呪われる。全ての民は、“アーメン”と言わねばならない」(申命記27:19)、また、困っている人や兄弟たちのために人間の手を開くことを聖書は告げている。全ての人間が手を合わせ、平和の祈りを捧げることには大切な価値がある。人間を善くしようと祈る心は純潔である。しかし、人間は、貧しい者に食べ物を与えれば人の義務を果たしたことにはならない。与える側の人の権利と同じように与えられる側の人間の権利も考えていかなければならない。さらに、新約聖書では、生まれた時から目が見えないこどもを癒す箇所がある。「生まれつき目が見えないのは、誰かが罪を犯したからですか。本人ですか。それとも両親ですか」(ヨハネによる福音書第9章2)、イエスは答えた。「本人が罪を犯したからでも両親が罪を犯したからでもない。神の業がこの子に現れるためである」(ヨハネによる福音書第9章2-3)、この箇所からは、障害が罪の結果ではないこと、そして、罰が子孫にまで及ぶという因果応

報説を否定していることが読み取れる<sup>14)</sup>。生きていくために守りの必要な人間に対して、神の働きがあるのだという新しい考えがイエスによって示された。モンテッソーリ教育学では障害を特別なことと考えず、新約聖書と同様に人間の固有の尊厳を持つ存在であるということを共に生きる社会の中で、共に生きる喜び、苦しみの方法の発見、そして、愛の交わりを通して深く認識させている<sup>15)</sup>。それらの営みは、徐々に我が国でも統合教育(正常児と障害児の)に結ばれている。

## (2) マリア・モンテッソーリの創造的使命

聖書と信仰の心を抱きながら統合教育の意思を持ち、障害児福祉の道を一步ずつ歩み続けたモンテッソーリの精神はモンテッソーリ教育学と共に息づいている。現在の医学や心理学等は人間を育てる上で一助となる者であるが、それ以上に大切なものは人間的な関わりであると考えられる。

本稿では、聖書を通じてモンテッソーリ教育学が神学を潜めることを伝授している。マリア・モンテッソーリの生きた時代が世界大戦の最中にあり、社会は荒れた時代にあり神学は認められなかった。平和と人々の幸せを願うモンテッソーリの心の内側に聖書は生き続けた。

日本の社会の中で現在起きている様々な弱者と偏見に関する問題は精神的エネルギーの消失に繋がっているように思われる。生きる喜び、困難を乗り越える力、愛と平和、知性、勇気、寛大さ、思いやり、受け入れ、支援、そして、感謝、許し合うこと、それらの全てがマリア・モンテッソーリの創

造的使命であることを、本稿を通じて確認したい。

## 7. おわりに

今回、聖書を参考にし、弱者と偏見について述べた。本稿を書き留める最中、筆者が本学の研究室に初めて入室した日、重い荷物を運んでくださった教員があり、救いをいただいた。それが何よりも心に焼きつき、自己紹介で思わず御礼の言葉を発したことを思い出した。また、テーマを考察する途上、筆者が現在担当する科目、領域指導法「人間関係」と領域指導法「言葉」において、二つの科目が絡み合い、人のコミュニケーション力を育てていることを発見した。

人間は、道徳心や規範意識、また、協同性が身につくおらず、自分勝手であれば、偏見を浴びることもあることも角度を変えて考えてみると非常に重要な点に思われる。

モンテッソーリ教育学では「正常なる子ども」、あるいは、「規範」から逸脱した子どもを理解するために、犯罪人類学の専門家として知られるロンブローゾ(Cesare Lombroso, 1836~1909)から学ぶことがあったと述べられている<sup>16)</sup>。マリア・モンテッソーリは、ローマでの講演後、精神薄弱児施設の職を辞して再度心理学と哲学を先行している。

本稿を綴りながら、人間を真に理解するには、医療や実験科学では不十分であることを悟り、生きることを概念に持つ「人類

学」の視点から障害を見つめていった。

人間に関わる倫理は、存在する人間そのものを取り巻く聖書の中でもゆっくりと動き、螺旋状になり自分探しをしている。

## 文献

- 1) M・モンテッソーリ, 坂本堯訳(1970)『人間の形成について』エンデルレ書店 p. 45
- 2) Association Montessori International (2008) Empirical research and observation In Communication (pp.6-8). Amsterdam, Netherlands: AMI.
- 3) 『聖書 新改訳』(1992)日本聖書刊行会, pp.262-264
- 4) 同上, p. 266
- 5) 鈴木大拙(1975)『禅とは何か』春秋社, p.82
- 6) Ibid; p.136, “Vi assuro Che se non avrete auto la Certezza Che Izumo puro ensure meliorate, non-Averete abut la forza di lot tare per cinq anta ai era state distraction area la forza, all amia eta, di continuer a gyrate distrust. Non Averete la forza, all amia eta, di continuer a garage per il mondo, predictand Questa veritas.”
- 7) Ibid; p.137.“Digna di speciate note e la sue Anisa di averse dale leggy alle quail birdie. Prove dinette ed experience pastiche mi henna peruses Che e necessaire slurpier Nel bambino il Suo latent bison di assure legato ad una ledge e cultivar in Lui la gilia di obedient.
- 8) 前掲書6) Ibid; p.136.
- 9) Ignatius de Loyola, Emerita Spiritualities.日本語訳版は、霊操刊行会訳 [エンデルレ書店, 1968年. ホセ・ミゲル・バラ訳(新生社, 1986年)の2文献ある]
- 10) クラウス・ルーメル編(1999)『モンテッソーリ教育の道』学苑社, p.362
- 11) 同上, pp.363-364
- 12) 大貫隆(1998)『世の光イエス・福音館のイエスキリスト-ヨハネによる福音書』講談社, p.149
- 13) 小田兼三監(1984)『聖書と福祉-共生の社会を目指して』エマオ, pp.84-86
- 14) 高橋虔・B.シュナイダー監(1996)『聖書と福祉-共生の社会を目指して』 pp.102-103
- 15) 春名苗(2011)『聖書における罪と障害者』聖隷クリストファー大学社会福祉学部紀要 第46号 p.22
- 16) M.ヘンゲル著・渡辺俊之訳(1989)『古代教会における財産と富』 p.96